

『蒼頡篇』と『急就篇』

そうけつへん

「きゅうしゅうへん

役人の採用試験に合格するために、学生が勉強した、漢字を覚えるための識字教科書。人名によく使う文字などが書かれている。9千字字以上を暗記しておれば役人に採用されたようだ。さらに八体（または六体）の書体の試験をして優秀な者を上級の役人に採用したらしい。六体とは王莽の新代に整理されたもので、古文・奇字・篆書・隸書・繆篆・虫書である（新の六体）。八体は秦の八体のことである。主に役人は隸書を書いたと思われる。「隸書」は、私信などの走り書きのようなものから一画一画丁寧に書かれたものまで多くのタイプにわかれている。

「蒼頡篇」は秦の李斯が作った。後に宦官の趙高の「爰歷篇」胡母敬の「博学篇」と一緒にされたものも「倉頡篇」とよぶ。漢代の初期まで民間の書塾（書館）というで使われたようである。前48年頃（前漢）に宦官の史游が『急就篇』を作ると、『急就篇』が「倉頡篇」に代わり流行した。5世紀末から6世紀初めころ梁の周興嗣によつて『千字文』が作られると『千字文』が識字教科書の主流となつた。「倉頡篇」は3300字。「急就篇」は2千字余り。「急就」とは、すみやかに、速成であるとの意。

「蒼頡篇」の習字例（敦煌漢簡）



草書

篆草と草隸

「篆草」篆書を速書きしたもの。古くは長沙の楚の竹簡に見られる。しかし、これは今の草書につながるものではなさそうである。

秦代の秦簡の中に篆書から隸書に変化する過程に草書化が見られる。

由舊夫勿更首共賞不堵土貨而人

	金文	小篆	秦隸	草書
夫	夫	夫	夫	夫
水	水	水	水	水

篆書からできた草書の例

篆書

篆書

篆書

無
無
一
每
一
無

篆書からと篆書からの例

篆書からの例

書
畫 曳 丟 由 乎 𠂔

𠂔

𠂔

武威漢簡

〔武威医藥漢簡〕
（後漢初）
隸書から章草風・草書が見られる。
— しょくしゆから じょうくわう・そうしょがみられる。 —

金
紫
補

敦煌漢簡

〔元和四年簡〕（後漢・87） 隸書から行書風へ。

出庫二解
元和四年八月五日解人張季元
平望
蜀僕長慶

和
張
付

居延漢簡

「永元器物簿編簡」部分（後漢93～98）
えいげんきぶくほへんかん
行書・草書で書かれている。

元々ノコトナリ
活長ノシテ丸毛此ニラシ
ノミ前編・次モ丸毛此ニラシ

章草と今草

章草は『急就篇』を作った前漢の史游が八分隸を略して創ったと伝えられている。主に尺牘に用いられた。

草書は一般に章草から今草へと展開したと考えられているが、今草の後に章草へとまとめられていつたという説もある。「独草」である。

今草（草書）は章草を略したもので後漢の張芝（伯英）が創ったと伝えられている。しかし、出土した木簡などから見て草書は個人の作ったものではなさそうであるが、しかし、この二人は草書の展開に何らかの大きな役割を果たしたのではないだろうか。

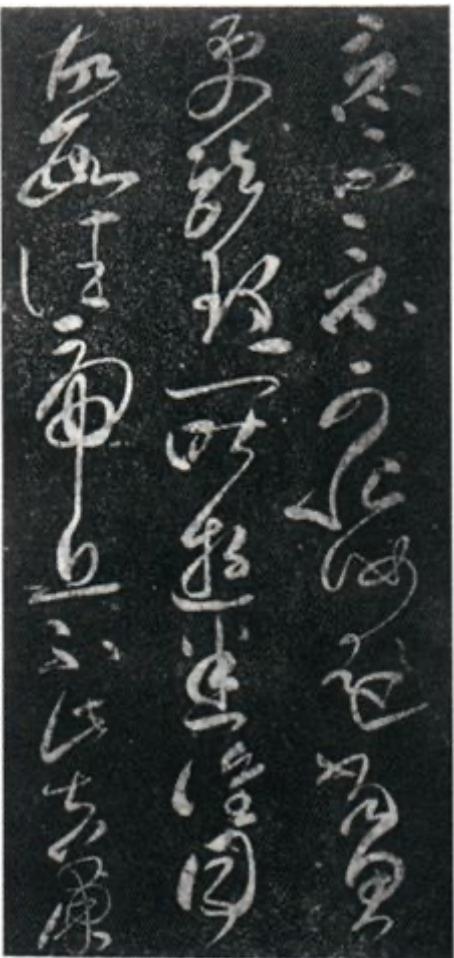
※史游（生没年不詳）

※張芝（？～192）草聖と称えられる。『後漢書』という正史に書人として名の載る最初と思われる。

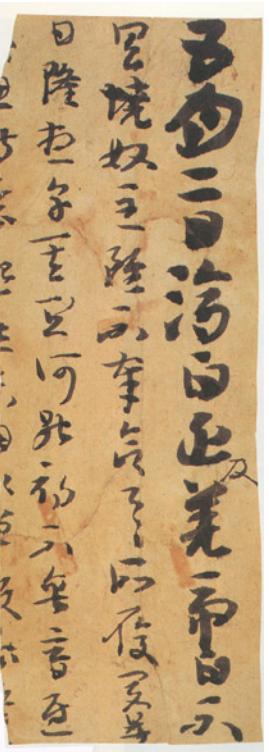
の故事により、「書道のことを臨池」という。他に杜度、崔瑗も草書の名手と称えられている。

※現存最古の書論『非草書』（後漢の趙壹の書）に「草は本と易くして速し。今は反って難しくして遅し。指を失うこと多し」草書を非難して、蒼頡や太史籀の時代のような正しい本來的な字形に帰るように論じた書。

草書帖（張芝・後漢末） 今草（草書）



西域出土残紙（漢～晋）紙に書かれている。今草（草書）



急就篇 皇象（生没年不詳・呉）章草 「急就章」ともいう。

第一急就篇 狹文家集急就篇
第一急就章 奇觚與衆異羅列
諸物名姓字分別部居不雜
寫用回狗
勉力移

月儀章 索靖（239～303・西晋）章草 手紙の手本集。

晉索靖月儀章



應月里也天自大捨布乘承
風篤友既亥號也營革半方
隨眾區漢言因爻活引經毛
權情色採寫企行狗仇及惠
回信李蒸之但蒙告音采回

平復帖 陸機（261～303・西晋）章草 24×26 cm



也

字

しんぞうせんじもん
真草千字文

部分 伝智永（生没年不詳・隋）

飛驚湍寫禽獸畫蝶仙靈
死矣國家無敵盡仙靈



しょふ
書譜 孫過庭

（648～703・唐）

687年作 部分。

全文3727字。

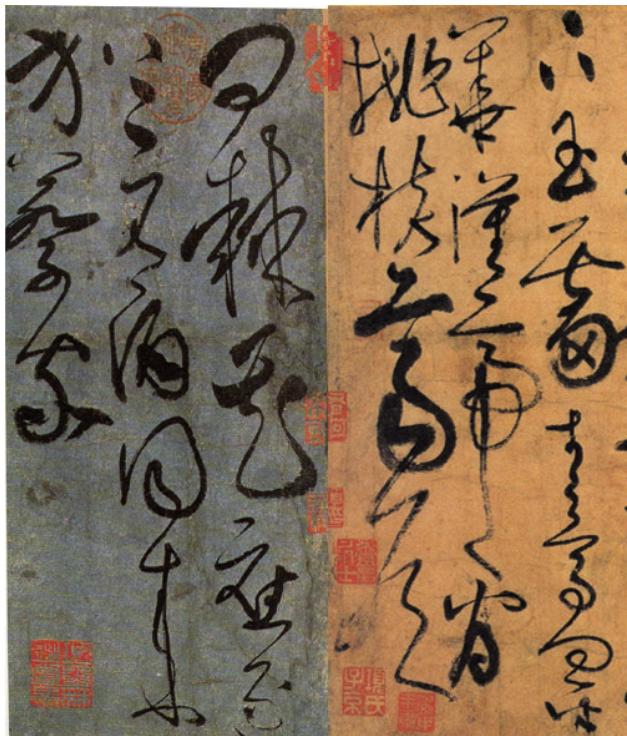
子初惟一一本初好以詩也
少也以毛爲次以酒也
魏以精猶矣也酒神也
形標也酒之次至一毛於也

新しい草書「狂草」の出現

こじじょう
古詩帖

伝張旭（生没年不詳・中唐）

8世紀の李白と同時代の人。「狂草」の創始者。酒と髪の毛の伝説。

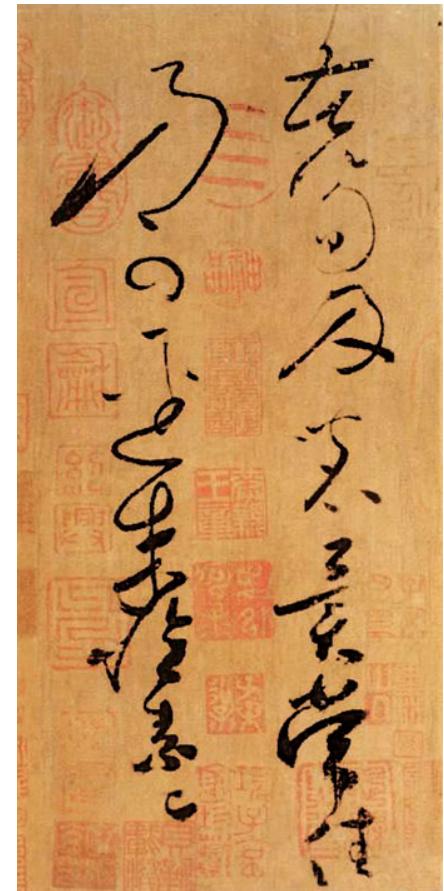


苦筍帖

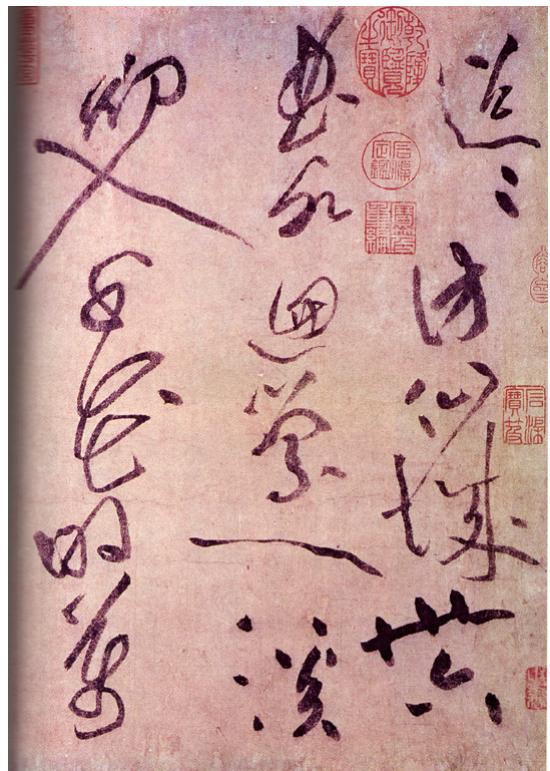
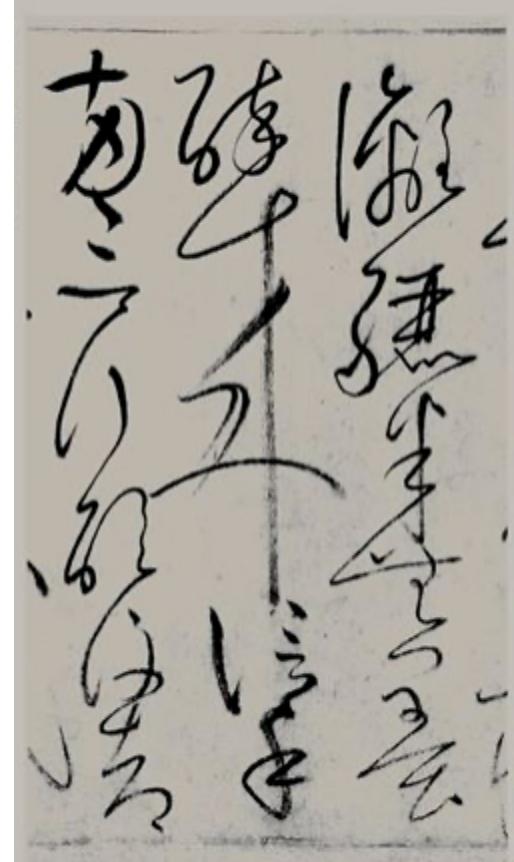
懷素

(725? ~ 785? · 中唐)

狂草の達人。芭蕉の木1万本の伝説。



自叙帖部分 (777年) 懷素

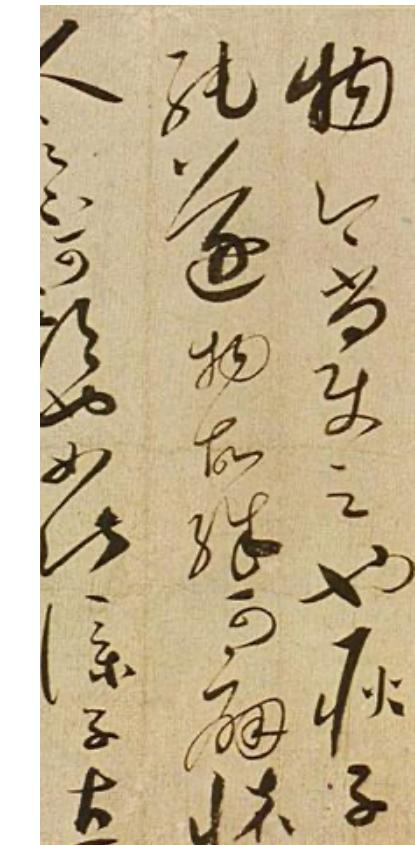


李白憶旧遊詩卷 黃庭堅 (1045~1105 · 北宋) 狂草

陶生帖

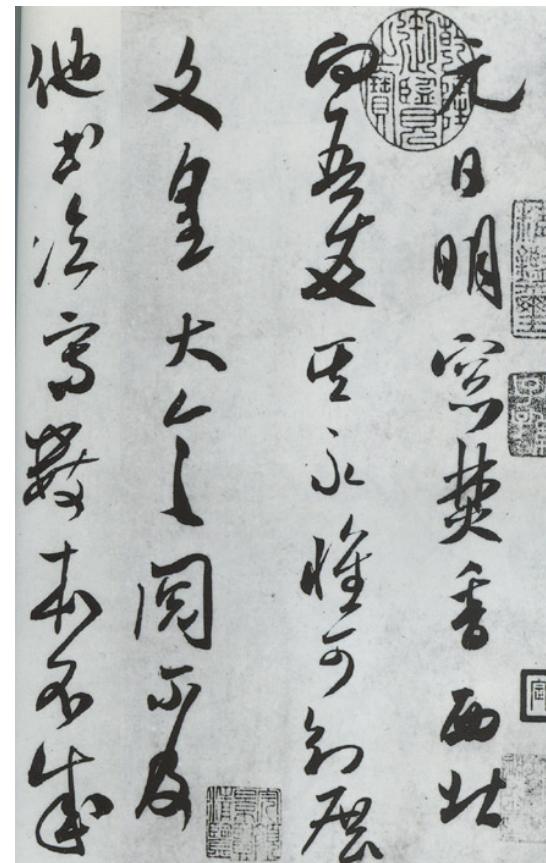
蔡襄 (北宋・1012-1067)

(尺牘)



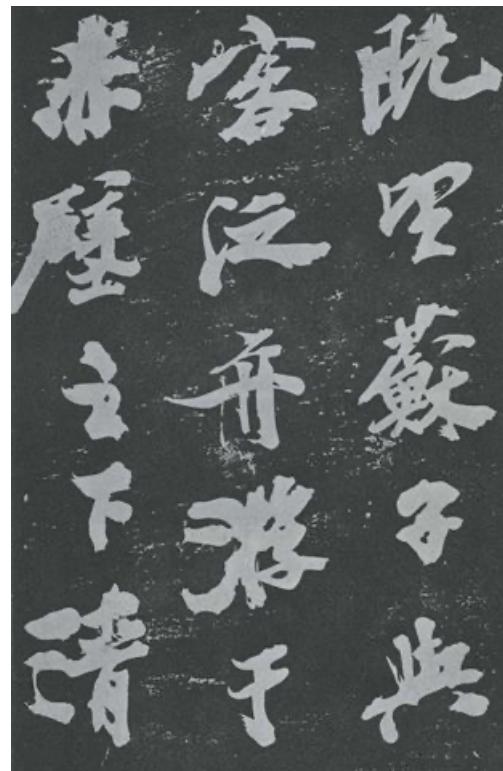
「元日帖」部分

米芾 (北宋・1051-1107)



前赤壁賦卷

蘇軾 (北宋・1083)



李白仙詩卷

(北宋・1093)

蘇軾 縱34

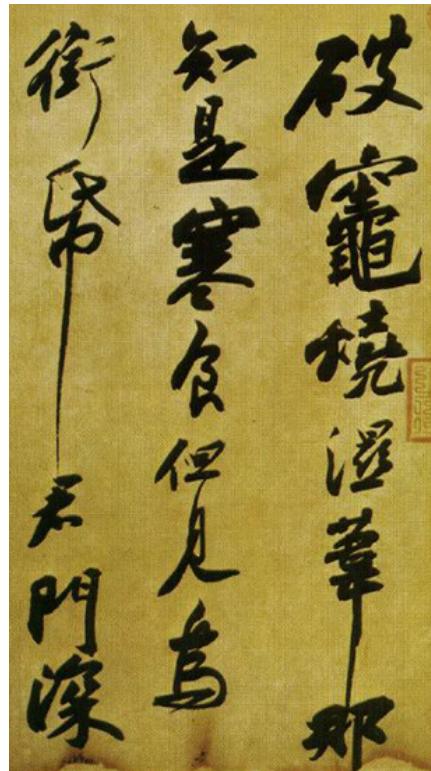
全長約111

部分

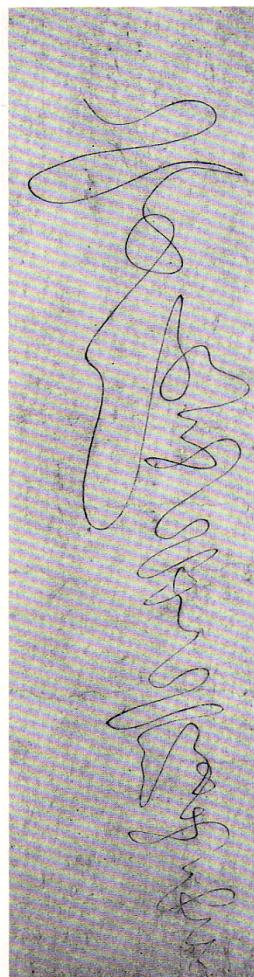
大阪市立美術館藏

人生將上萬光滅乃妍盡春風
纏綿逐日與往進只知兩密貪不
向寒首近我苦飛晝時慘見
向寒首近我苦飛晝時慘見

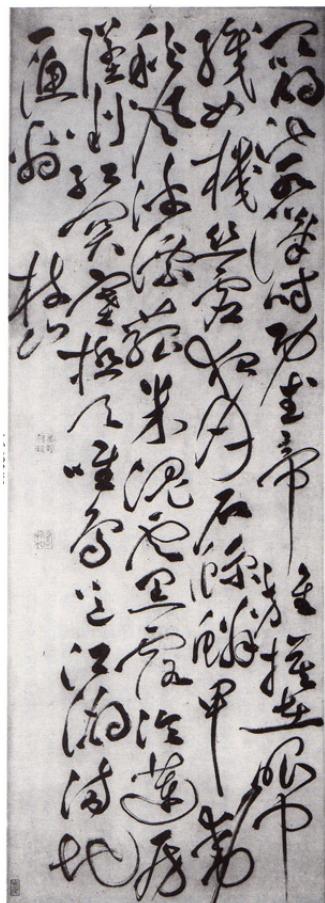
黃州寒食詩卷 蘇軾 部分 (北宋・1082)



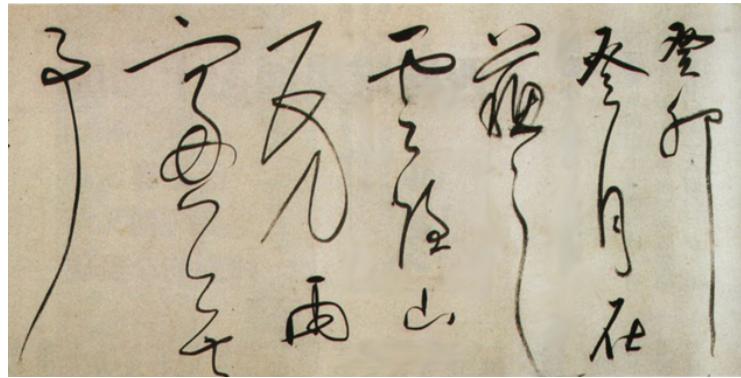
游絲書 呂說 (1145・南宋) 連綿草 游絲とは「かげろう」のこと。草際芙蓉零



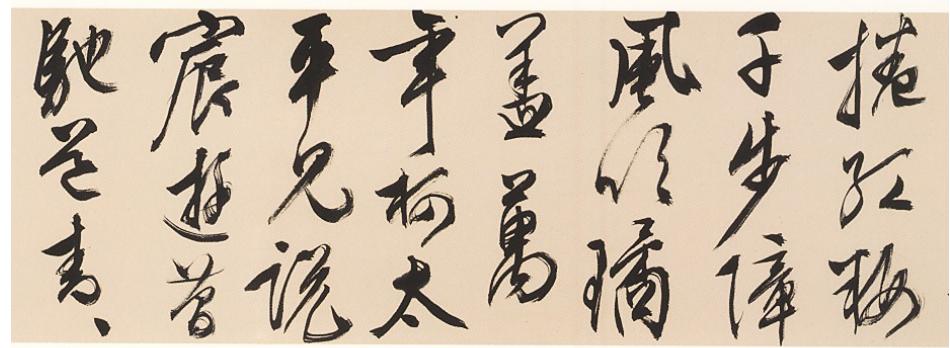
草書七言律詩軸 祝允明 (1460~1526・明) 狂草 草書では懷素をしのぐと言われる。



行草書西苑詩卷 文徵明 (明)



行草詩卷 董其昌（1597・明）



連綿草 董其昌は書を机上の小技から壁面の芸術に導いた重要な書人である。

長条幅 連綿草の出現 縦の長さが4尺5寸（約136cm）よりも長い条幅を長条幅という。

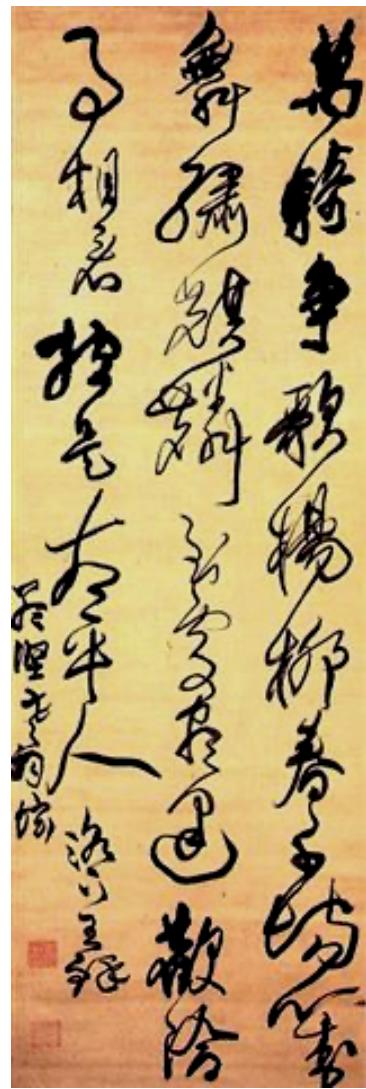
こうべきしゃじんぜつくじく
高適七言絶句軸 おうたく

王鐸

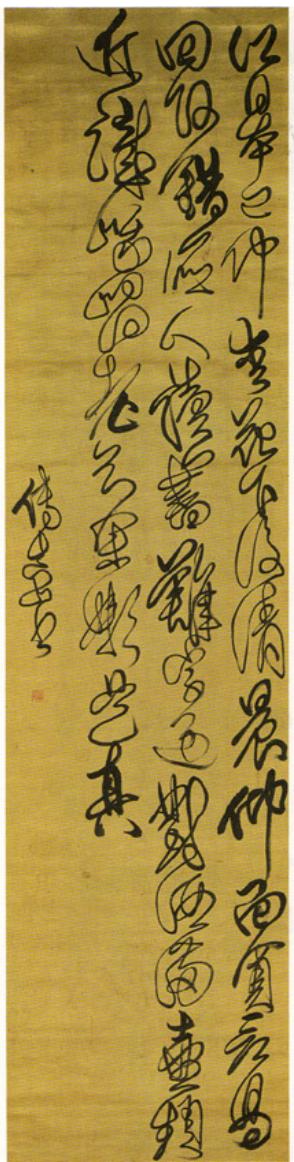
(1592～1652・明末清初)

みんまつしんじょ
連綿長条幅

れんめんちょうじょうふく
連綿長条幅



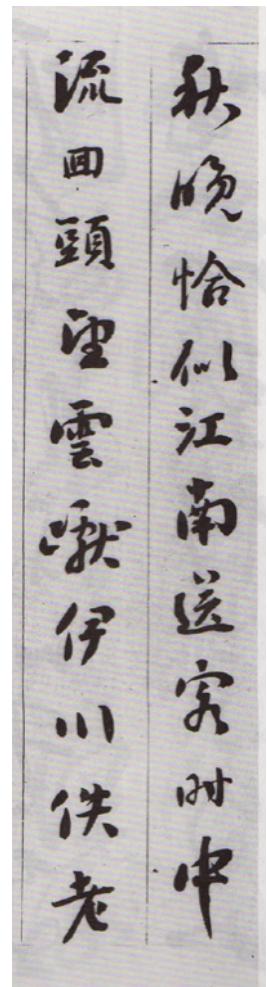
杜甫五言律詩軸 傅山 (1607～1684・明末清初) 連綿長条幅



帖学派と碑学派の草書

雜帖冊 刘墉 (1719～1804・清)

劉墉は清朝帖学派の大成者。



草書五言聯 鄧石如 (1743～1805・清)

鄧石如は清朝碑学派の代表。



中国歴史の父といわれる司馬遷（前145～？）によつて書かれた。

父司馬談の死から20年の歳月を費やして前91年ころに完成した。

五帝より前漢の武帝までの中国の歴史が書かれている。中国正史の第一（「紀伝体」と呼ばれる形式）

130巻52万6千5百字。12の「本紀」10の「表」8の「書」30の「世家」70の「列伝」より成る。

幅2～3cm、長さ30～50cmほどの竹簡か木簡に綴られたと考えられる。

武帝（在位前141～前87）による迫害を警戒し、ひそかに娘に託され、娘の子の楊惲によつて前73～前49年ころに公表された。

伯夷・叔齊列伝 列伝全体の冒頭「天道、是か非か」

「世の中では悪行の限りを尽くした人間が天寿を全うし、行いに気をつけて、正しいことを正しいと言う人物（例えば伯夷・叔齊や顏回）が突然不幸な目に遭つて死んでしまうことが数限りない。一体全体、天が示す正しき道などこの世に有るのだろうか？（いや無い）。善行を行つた人物で歴史に残らなかつた人物は数限りない。これら的人物は、孔子の様な人物に紹介されてやつと後世に名前を残してもらえるに過ぎない。」

司馬遷の人生観「歴史を動かす主体は人間である」

「任安に与つる書」

「本来自分は死を恐れない、あの事件の時、死を選ぶのは実に簡単な事だつたが、もしあの時死んでしまつては自分の命など九頭の牛の一本の毛の価値すらなかつた。死ぬことが難しいのではない、死に対処することが難しかつたのです。自分が死んでしまえば史記を完成させることが出来ない、仕事が途中のままで終わるのを自分はもつとも恥とするところでした」と述べ、更に「そもそも宦官として生き恥を晒している自分が賢人を推薦するなど滅相も無いことであつたのです。今の自分はただ、『史記』の完成のためだけに生き永らえている身であり、この本を完成させて原本を名山に納め、副本を世に流布させることが出来たなら、自分は八つ裂きにされようともかまいません。」



草書の特徴

より速く、より簡略に書くために考案されたもの。（後に芸術的な書体に進化した）

連續性

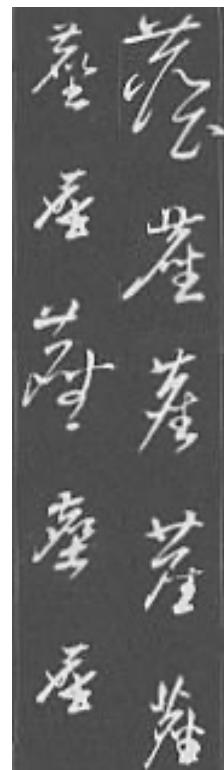
流動的（流動美＝筆の速度、筆勢、リズムなどによって生まれる）

律動性

横画が右上がりになる（正書体の篆隸と異なる）

回転運動が多くなる（円転滑脱＝円味があつて、すべりのよいこと）
実画と虚画（虚画をどう書くか）

許容の形・・・・・塵



造形原理は「均衡」（バランス感覚）・動的、量的な均衡（点画の太さ、長さ、重さ、動き、墨量、濃淡、潤渴、力の大小、文字の大小など）

多様な筆づかいが大切

あらゆる運筆法、用筆法が使われる。（直筆、側筆、順筆、逆筆、藏鋒、露鋒、捻筆、折筆、転筆など）

書法の出発点（漢末・蔡邕の『石室神授筆勢』）より

「書は自然に肇まる」書法は自然の「道」に則すことによつてはじめて秩序と調和ある美しい表現に到る。

中國人の自然観

天地宇宙は一つの秩序に貫かれている。（自然には一つの「道」または「理」が存在しているという認識）

雷簡夫は川の流水の音を聞いて用筆法を悟つた。

懷素は夏雲のさまを見て書法の表現に結びつけた。

鍾繇は万物の形象を書の表現に結びつけた。

張旭は天地の事物のあらゆることを見ては、その感動を書に表現した。

書法の終着点（清末の劉熙載）

「人に由りて天に復する」

「人（書法）から出発して、人工の極致で天（自然）に還つてゆく」書を学ぶ者には「観有り。曰く、物を観る、と。曰く、我を観る、と。」

蔡邕の「九勢」

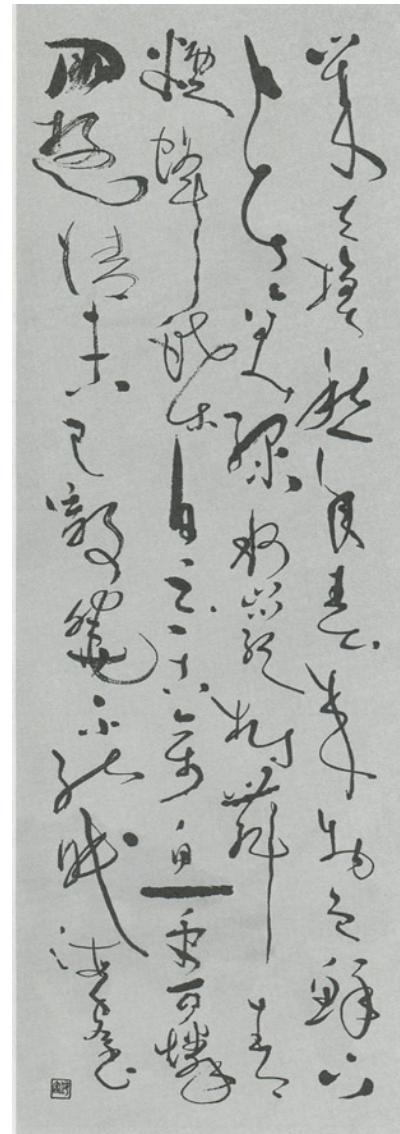
筆力の充実が線の美を生む（筆力を生むための運筆法）

一、虚画（空画）と実画「脈絡と調和。運筆の円転」

二、藏頭護尾「力は字中に在り」

三、疾と渋「肌膚之れ麗し」「力」「勢」「骨力」「動と反動」

蔡邕は書法と人間の心の動きと自然の理法などを書法の中で総合的に考え始めた最初の人といつてよい。（用筆・運筆が一番大事であると考えた）また、人生には政治以外の自然や芸術の世界があることを発見した最初の人といわれている。



日本の草書一作品

益田池碑銘部分 伝空海 (825)



高野切 第三種 部分（平安時代・連綿の仮名）



わが心はかくもにうらや
ゆのうをいとふやまぢれとてよしゆ
あひくはるひのいろにうよしゆ
うよのやまれうけたまひえう